

チャールズ・ボウデンとゲイリー・ウェブへ捧ぐ

日本語版へのまえがき

私は今、本書（原題 *Spooked: How the CIA Manipulates the Media and Hoodwinks Hollywood*）の日本語版へのまえがきを書いていることをとても光栄に感じている。私は三〇年近く前に大学で日本語を学んだが、自分の著書がその日本語で出版される日が来るとは夢にも思っていなかった。それだけに、掛け値なしに心から誇らしく思う！ 本書がアメリカで出版されたのは二〇一六年六月、アメリカは歴史的な大統領選挙へと突き進んでいた。一匹オオカミの候補者ドナルド・J・トランプがアメリカの政界に激震をもたらし、伝統的であり想定外のことが起きない二大政党を中心とした選挙による政治から、根本的に異なる新しい政治への巨大な転換が起きていた。その一連の過程は政界の再編と経済的・社会的混乱をもたらし、それはいまだに収束していない。

「フェイク・ニュース」や「ディープ・ステート」（国家内国家、闇の国家）といった用

語は今ではすっかりおなじみになってしまった。だが本書の出版当時は、共和党の反乱分子とも言うべきトランプが大統領候補になったために、それらの用語はようやくアメリカ内外のメディアに登場し始めたところだった。つまりあらゆる面でもまでは言わないが、本書の出版から今日までの二年間で報道メディアやハリウッドと中央情報局（CIA）との関係は大きく変質したのだ。それはぜひとも強調しておきたい。一つの大きな変化は、トランプ政権の誕生が図らずも報道メディアに新たな生氣を吹き込んだことだ。それは衰退しつつあったアメリカの活字メディアで特に顕著な動きだ。ビル・クリントン、ジョージ・W・ブッシュ、バラク・オバマの各政権時代、政治権力の濫用やアメリカによる海外侵略が引き起こした情勢の不安定化（サダム・フセインが大量破壊兵器を保有しているとの虚偽の主張に基づく二〇〇三年のイラク侵攻と、その後の「イスラム国」の台頭がもつとも明白かつ特筆すべき事例だ）に対し、報道界全般は権力の番人の役割を積極果敢に果たしていなかっただから。

トランプのような候補が世論調査で高支持率を得るという前代未聞の事態となり、やがて大統領選で勝利できた理由の一つは、この数十年で深刻化してきた報道メディアに対する世間の不信感をトランプが抜け目なく利用したことである。近年、有権者の報道メデ

アに対する信頼は一貫して下降線をたどってきた。その主な原因は報道機関側のあり方に問題があったからだ。だからトランプは自身に関するネガティブな報道があれば何であれ、メディアに対する政府内の協力者（いわゆる「ディープ・ステート」）がでっちあげた「フェイク・ニュース」だと、皮肉を込めて攻撃することができた。ご存じのとおり、トランプは大統領に就任してからもこうした報道界に対する執拗な「口撃」を繰り返してきた。それを彼の支持者たちが引き継ぎ、ソーシャル・メディアだけでなく、フォックス・ニュース、ブライトバート・ニュースをはじめとする右派系メディアを通じてテレビやインターネット上でも攻撃を続けているのだ。

こうした大きな変化にもかかわらず、本書が追及しているメディアと権力の関係の根本的な危うさは、今日でも変わらず存在する。それどころか、ともするとトランプをめぐる騒々しい報道合戦に目を奪われがちな現状を考えると、この危うさを理解しておくことは大統領選挙の前よりもいっそう重要だとも言えるだろう。

一つの重大な問題点は、CIAがアメリカ国内の報道メディアを直接的に操ろうとすることには強い規制があるものの、海外メディアとの関係に関してはいまだにそうした規制がないということだ。だから都合のいいネタを海外メディアに流して報道させるといふの

が、CIAの長年変わらぬやり口となってきたのだ。

例えば本書にも登場するフランク・スネップというCIAの元職員は、ベトナム戦争の最後の数年間にマスコミ対応を担当してこの戦争の実態について世論を欺き続けた人物だ。スネップは当時みずからアメリカの外交政策について原稿を書いてリークし、それらが『エコノミスト』誌などの有力誌で記者名義の署名記事になったことを明かしている。今日のようなインターネットとソーシャル・メディア全盛の情報環境下では、ニュースや情報はあつという間に効率よく拡散し、再生産される。このため世論を操作するために外国の報道メディアを利用することはかつてなく容易になっていることを、CIAも認識しているのだ。

CIAが世論を操作する主な目的は機密情報を隠しておくことである。つまりそれは主として、CIAの利益に反すると思われる情報を世間の目に触れないようにしておくということだ。確かに、国家の安全保障にとって死活的な機密の保持はCIAにとって正当な行為と言うべきだろう。だが世間に知られたくない、自分たちにとってばつの悪い情報を暴く報道をCIAが阻止してきたという、そんな事例があまりにも多く明らかにされてきた。

さらに今日でもなお深刻な問題なのは、CIAが報道メディアと映画産業の両方に対する影響力を駆使して、テロの脅威などに対する世間の不安を煽り増幅するようなストーリーを作り出すこともできるとのことだ。そうしたストーリーはまた、CIA自体の存在を正当化しようとする傾向が強い。かつて『ニューヨーク・タイムズ』紙の記者として国家安全保障問題を取材したジェームズ・ライゼンが警鐘を鳴らしているとおり、CIAは「報道機関を管理し、記者たちが書く内容を制限したい」のである。ライゼンは政府がアメリカの市民らを違法に監視していた事実を、投獄のリスクを冒してまで暴露した男だ。それだけに、メディアとCIAの間の情報戦争の重大さを痛いほどわかっている。「私たちは何よりも国家安全保障が優先されるいわゆる公安国家」「National security state」特に重視し、軍や情報機関が強力な権限を握る国家体制。国防国家、安全保障国家と訳されることもあるを作り上げ、それは金額にすれば何十億ドルもの価値となる巨大な機構なわけですが、それが私たち市民の自由を踏みにじり、私たちは公安国家が喧伝するが実は存在すらしない脅威に怯えながら暮らしているのです」とライゼンは言う。

「国境なき記者団」が発表した二〇一七年の「世界報道自由度ランキング」を見ると、アメリカと日本の両国は教育の充実した、世界を代表する先進国であるにもかかわらず、報道の自由に関しては四三位と七二位である。特に日本のランキングの低さが目立つ。先進

諸国の中でも最低クラスだ。朝鮮半島における核兵器をめぐる予断を許さない情勢から、軍事的・経済的な力をアジア全域およびその先へまでも伸長させてますます自己主張を強める中国にいたるまで、日本および世界各国は数々の脅威に直面している。そんな中で、政府当局の機密がどのようなにして保持されるのか、そして国民のためだとされる政治判断や政策を当の国民が知るのを妨害することに、報道メディアがどのような役割を果たしているか。それらを日本の国民がみずから学んでいくことが絶対に欠かせない。日々接するニュースや娯楽作品がどのようなにして国民の目に触れ、耳に届くのか、日本のみなさんがしっかりと認識しておく上で、本書がその一助になることを心から願っている。またグローバル市民として私たち一人ひとりが当局の筋書きを疑い、私たちが「ニュース」と呼ぶものの中で何が現実であり、そして何が現実でないかを見極め、みずからの意見を形成していく上でも。

どんな政府も嘘つきどもが牛耳っており、やつらの言うことは一切信じてはならない。

—— I・F・ストーン（ジャーナリスト、一九〇七〜八九年）

目次

日本語版へのまえがき

3

序章 合わせ鏡の荒野

16

ビンラディン襲撃作戦の裏側／ホワイトハウス版のストーリーの嘘

アメリカ政府と大手報道機関からの反撃

CIAが作り出す「合わせ鏡の荒野」

ビンラディンの潜伏先を告げたパキスタンの情報提供者

それでも残る公式発表への疑問

第一章

私はだいたいなんだって食べちゃうんです

33

CIAに取り入った女性記者／情報機関と秘密漏洩者のイタチごっこ

記事掲載を中止させるCIAの常套手段

棚上げされた『ニューズウィーク』誌のスクープ記事

政府の言いなりにならなかったゴールドマン記者のスクープ

第二章

神と国家のために

『ローリングストーン』誌の暴露記事／CIAの違法活動を伝える極秘報告書

CIAとメディアの攻防——ベトナム戦争「フェニックス作戦」の真実

CIAはこうして報道陣を騙した／CIAお抱えのジャーナリストたち

ベトナム戦争末期のCIAのガセネタ・キャンペーン

明かされたCIAの違法活動と恐るべき技術力／短命に終わった攻撃的報道の時代

CIAが雇ったニカラグア反政府ゲリラの宣伝マン

隣国ホンジュラスを拠点にしたコントラの宣伝作戦

幻に終わったコントラの「チェ・ゲバラ」

外交広報局を裏で操ったCIA／アメリカ政府に睨まれた記者たち

古くて新しい報道機関操作のテクニク

CIAと親密だった『ワシントン・ポスト』紙の敏腕記者と編集者

井の中の蛙だったAP通信の編集者たち

墮落していた『ニューズウィーク』誌編集部／ついに記事になった大スクープ

第三章

告発者を殺せ

逮捕を免れた「コカイン王」／麻薬密売団と内通していた元刑事

特ダネを報じた記者への忠告／大スクープに慌てたCIA長官と大手新聞社

大手新聞からの総攻撃

疑惑もみ消しに走った『ロサンゼルス・タイムズ』紙のずさんな取材

政府の番人を演じたベテラン記者

コントラ支援と麻薬取り引きへの関与を認めたCIA

貴重な人材を失ったアメリカの報道界

第四章

米軍に「埋め込まれる」従軍記者たち

ブッシュ政権の戦争熱に同調した報道界

第五章

グアンタナモ収容所の隠蔽工作

ガセネタに踊らされた『ニューヨーク・タイムズ』紙記者

米軍のイラク侵攻に論拠を与えた『ニューヨーク・タイムズ』紙の誤報記事

責任を負わなかった『ニューヨーク・タイムズ』紙編集部

CIAがリークしたイラクの大量破壊兵器の真実

コリン・パウエル の国連演説と「イエロー・ケーキ」の嘘／ブッシュ政権の意趣返し

米軍の統制下に「埋め込まれる」従軍記者たち／世間の信頼を失ったメディア大手各社

大手メディアと政府の根強い共謀関係／独立系報道機関の存在意義

プロバガンダ一色のグアンタナモ収容所取材ツアー

特別扱いを受けた大手テレビ局——グアンタナモ収容所独占取材

取材受け入れ前の念入りすぎるリハーサル

秘密施設——グアンタナモのアウトシュビッツ

暴かれたグアンタナモ収容所の拷問死事件／なぜ誰も責任を問われないのか

第六章

ハリウッド 銀幕をねらえ

ハリウッドを操るCIA

イギリスの文豪グレアム・グリーンも激怒した映画化作品

CIAに批判的だった一九六〇～七〇年代のハリウッド

映画化権を買って握り潰す——CIAによる映画化阻止工作

映画製作陣に「協力」するCIAの「ハリウッド担当」たち

CIAとハリウッド、空前の大成功——映画『アルゴ』

国土安全保障省長官を有頂天にさせたドラマ・シリーズ『ホームランド』

ストーリーに困ったら、CIAに訊いてみよう

CIAはなぜ『ミッション：インポッシブル』を気にしないのか

CIAが企画段階から肩入れた映画『ゼロ・ダーク・サーティ』

『ゼロ・ダーク・サーティ』は拷問の正当化に利用された

事実を「ふくらませて語る」CIAのコンサルタントたち

映画になっても叩かれた、CIAの麻薬密輸工作を暴いた記者

終章

ザ・ウルフ

欧米人の人質を誤爆したCIAの「識別特性爆撃」

ドローン爆撃の陰の推進者、「ロジャー」と呼ばれる「マイク」の正体

アフガニスタンで起きたCIA基地の悲劇

「マイク」の実名報道を阻止しようとしたCIA

一年以上「塩漬け」にされたCIAの盗聴計画を暴いた記事

アメリカの報道機関はなぜ「裏操作」されるのか

謝辞

訳者あとがき

原注

※訳注は「」で示した。

※本文中の*1などはその章の原注に対応する番号である。

※原注は巻末に記した。

第一章

私はだいたいなんだって
食べちゃうんです

二〇一三年一月二三日、情報公開を定めたアメリカの「情報自由法」に基づく二件の開示請求を受けて、CIAは五七四ページに及ぶ資料を公開した。国家安全保障問題を取材する記者たちとCIAの広報部門とがやりとりした電子メールの記録である。この宝の山のような膨大な資料は公開から一年ばかり世間の耳目を集めることはなかったが、二〇一四年末、調査報道専門のオンライン・マガジン、『インターセプト』誌の一連の記事で広く知られることになった。まさに爆弾だった。連載記事が明かしたのは、安全保障問題を担当するアメリカの名だたる記者たちの一部が、事実上CIAの協力者として無給で奉仕しているも同然だということだった。記者たちは執筆中の記事に関する詳細な取材メモだけでなく、掲載前の原稿の全文をCIAに送っていた事例もあったという。

CIAに取り入った女性記者

公開された電子メールのほぼ半数はある一人の記者に関わるものだった——最近『ウォール・ストリート・ジャーナル』紙を離れ、世界的な民間コミュニケーション企業のブランドウィック「企業や組織の財務、IT、広報、サイバーセ」「キュリティなどを扱うコンサルティング会社」に移り、以前よりも高給取りになったシヴォーン・ゴーマンだ。彼女がCIAの広報部門と交わした電子メールのやりとりから

は、バージニア州ラングレーにあるCIA本部を見学したいとか、CIAのトレーニング・ジムに関する記事を書きたいとか、当時のデイヴィッド・ペトレイアス長官と個人的に面会したいといったゴーマンのリクエストが明らかになった。ペトレイアス長官については、休憩時間に一マイル（一・六キロ）を六分間で走るのが趣味であり、一マイルを七分以内で走れる記者なら誰とでも面会に応じてくれると、CIA側がゴーマンに明かしている。

二〇一二年三月、ゴーマンはペトレイアス長官との「オフレコのディナー」というCIAからの誘いに乗った。CIAの報道担当官は「それはすばらしい！ 食物アレルギーはありますか？」と返信。「ないわ。私はだいたいなんだって食べちゃうんです」とゴーマンは打ち明けた^{*i}（ペトレイアスはやがて自身の伝記作家かつ愛人で、熱心なトレーニング仲間でもあったポラ・ブロードウェルに機密情報を漏らしたことで辞職に追い込まれた。ブロードウェルはペトレイアスにアクセスできる特別な待遇を利用して、『丸ごと入っている』（原題 *All In*）という絶妙なタイトルの著書を執筆した）。

同じ月、ゴーマン記者とCIA報道担当官（氏名は同局が非公開とした）との別の電子メールのやりとりの中で、ゴーマンは『ウォール・ストリート・ジャーナル』紙の「同

僚」が耳に入れてくれたことに言及していた。シリアのバッシュヤール・アル・アサド大統領の暗殺未遂事件があったとの噂を、その同僚が聞いたというのだ。「すてきな日曜日ですわね！ アサドが撃たれたって噂だと、ある同僚が言うんですが」と、ゴーマンは陽気な調子で書きだしていた。「あり得そうにないけど、クレージーな時代ですからね。真偽のほどは？」。CIA側の相手は噂を確認してみることを約束した上で、その同僚はシリアにいるのかと訊いた。ゴーマンは相変わらず饒舌すぎる例の調子で返信した——「いいえ。その同僚というのは実はうちの編集長なんです」。

のちにゴーマンはこの報道官の協力に感謝するメールを送っている。「前にも言ったとおり、うちの編集長の独自情報はいつも当たってわけではないけれど、編集長からなのでチェックしないわけにもいかないんですよ。それに彼はMI6の人たちとしゃっちゅう話をしていると言うものですから」と、イギリスの情報機関の名を挙げて説明した。その二カ月後の二〇一二年五月一日、ゴーマンは「UBL（ウサマ・ビンラディン）のお宝の翻訳」という件名の電子メールをCIAに送った。ちょうど一年前、パキスタンの邸宅を襲撃して世界でもっとも名の知れたお尋ね者を殺害したときに押収した、パソコン上の電子ファイルのことだ。CIAはそこから有益な機密情報を掘り出そうとしており、ゴーマン

は最新の状況を問い合わせたわけだ。

「ハイ、みんな。今日は一周年おめでとう、ってところかしら？」と、ゴーマンはまるでCIAの仲間内の人間のような調子で訊いている。

そのメールに対するCIAからの返信は（開示されたやりとりの中のほぼすべての返信と同様に）公開時に削除されている。おそらくそれはアメリカの安全保障上の配慮からではなく（なぜならCIAが記者たちに電子メールで最高機密を漏らすわけがない）、むしろ記者らとCIAの広報部門との癒着を白日のもとにさらしてしまうことになり、不都合だとして削除された可能性が高い。それでも、どうかCIAの検閲をすり抜けたそれほど実害がなさそうなメールでさえ、安全保障問題を担当するアメリカの報道陣の実態を明かしてくれる。彼らは政府の暴虐から一般市民を守る監視役を務めるどころか、監視する相手であるはずの巨大な情報機関にほぼ完全に取り込まれているのだ。

情報機関と秘密漏洩者のイタチごっこ

CIA本部の報道担当官たち（いずれも私の取材に匿名を希望した）によれば、彼らの仕事はかつてなく難しくなってきたという。メディアが発展した今日、パソコンさえ



NSAの膨大な監視システムに関する最高機密情報を暴露した、元職員のエドワード・スノーデン

持っていれば誰だってCIAに害を及ぼし得る情報をインターネット上に流すことができ、しかもそれはあつという間にブログやウェブサイトで次々と取り上げられ、やがてツイッターのようなソーシャル・メディア上で爆発的に拡散する。二〇一三年以降、メディアの状況が情報機関の関係者たちにとっていっそう厄介なものになっているのは確かだろう。同年、国家安全保障局（NSA）がアメリカ市民、そして友好国の政府までも対象に膨大な監視網を運用していたことが発覚した。NSAの元契約職員、エドワード・スノーデンが最高機密情報を次々と暴露していったのだ。それ以前にも、陸軍の内部告発者のブラッドリー（現チェルシー）・マニングによって、九・一一同時多発テロ以降のアメリカの戦争に関するショッキングな文書や動画がリークされ、

ウィキリークスが入手して公開した。マニングやスノーデンによる暴露はスパイ帝国CIAを根底から揺さぶったのだった。

最近では、情報機関の職員は匿名のハッカーや一匹オオカミのブロガーという新たな世界の住人を相手に、イタチごっこをしているような気分になることがあるという。あるCIAの報道官は、記者を説得して記事をボツにさせたり、秘密工員とその作戦を——あるいは単にCIAの面子を——守るための時間稼ぎとして掲載を延期させたりしようと奮闘しているというが、「スノーデン以降、九〇パーセントは失敗する」と、憂鬱な表情で述べた。「私たちは報道されようとしている記事の内容に具体的に論評するわけにはいかないのです、厄介です。だから『記事を掲載したら大変なことになりますよ』と遠回しに言うしかありません。私がメディアに指図することはできませんからね」と断言した。「私にできることといえば、記事を掲載すべきでない理由を述べ立てるくらいですが、だいたいは失敗します。なぜならそのころには機密に関わる情報はすでにどこかで漏れてしまっているからです」。

CIAに敵対的なメディアとして報道官が名を挙げたものの一つが『インターセプト』誌だ。同誌はこの数年間にCIAが行ったという残虐行為について、一連の記事を掲載し

てきた。それらはCIAにとっては都合の悪いものだった。中でも印象的だったのが「無人機文書」という記事で、情報機関関係の高官がリークした文書類に基づいていた。それらの文書によれば、米軍がドローンを遠隔操作して実行した空爆で、テロ容疑者たちよりも遥かに多くの罪のない一般市民が殺害されてきたというのだ。実にその比率は一般市民六人に対してテロ容疑者一人というから衝撃的だ。しかもリークされた文書そのものよりも、(少なくともCIAにとって)さらに気がかりなのは、情報を漏らしたのが明らかにスノーデン以外の人物だということだ。『インターセプト』誌の創業時の編集長の一人はグリーン・グリーンワルドで、『ガーディアン』紙やニュースサイトの『サロン』に執筆する元プログラマーだ。スノーデンはそのグリーンワルドにNSAの膨大な機密資料を提供したことで知られている(なお、『インターセプト』誌の創業時、グリーンワルドと共にローラ・ポイトラスとジェレミー・スケイヒルも編集長を務めていた。ポイトラスはスノーデンが二番目に接触した人物で、『シチズンフォー——スノーデンの暴露』というドキュメンタリー映画の監督として、グリーンワルドとスノーデンが香港で接触した様子を伝えた。スケイヒルは世界最大の民間軍事会社の特殊部隊を描いた著書『ブラックウォーター』や、ドローンによる攻撃などの実態を伝えるベストセラー、『アメリカの卑劣な戦争』

などで知られるジャーナリストだ)。

さらにオンライン・マガジンの『ヴァイス・ニュース』誌もある。同誌は安全保障関係を得意とする記者たちの中でもずば抜けてアグレッシブで怖いもの知らずな男、ジェイソン・レオポルドを抱えている。レオポルドは連邦捜査局(FBI)が「情報自由法のテロリスト」と呼ぶほどで、この情報公開法を徹底的に利用して政府の公文書を入力することで有名だ。レオポルドは安全保障問題の取材記者としては珍しく、首都ワシントンではなく、西海岸のロサンゼルス在住だ。「それには理由があるんだ」と、ワシントンの連邦議会から戻ってすぐに受けたインタビューでレオポルドは答えている。レオポルドはちょうど議会で証言して帰宅したばかりだった。レオポルドが証言したのは、公共の利益のために政府の公文書類にアクセスしようと努力しても、さまざまな情報機関に意図的に妨害されるか、ということだった。情報自由法に基づく開示の請求をしているのにもかかわらずだ。レオポルドは官庁街から離れて暮らしているが、確かに「情報の迅速な入手」という面では限界があるという。「でもそれだからこそ、情報をゲットしようと私はよりいっそうアグレッシブになれるんだ。それに私は『アクセス・ジャーナリズム』〔取材のため内部関係者などのパイプを保つことを優先し、報道する内〕」の犠牲にならずに済むからね。ワシントンなどで妥協する、権力者と癒着した取材・報道姿勢のこと」

ンにはんの一週間でもいれば、あの官僚制というやつに完全に呑み込まれてしまって、当局者とやたらと仲良しになってしまうものさ。でも私は距離を取っていたんだ」とレオポルドは言った。

オンライン・マガジン『ポリティコ』誌の国防関係が専門の編集者、ブライアン・ベンダーもそんな見方に同意する。ベンダーはワシントンで一〇年以上にわたって安全保障関係の問題を扱ってきたベテラン・ジャーナリストだ。「公安国家を取材するジャーナリストだったら、情報源へのアクセスと引き換えに代償を払わされることも多々ある」とベンダーも認める。「CIAにいきなり電話をかけて『記事を書いているんです。質問に答えてください』なんて言っても無駄だ。運がよければ協力もしてもらえらるだろう。だがたいいの場合、CIAにとって好ましい、妙な真似はしない記者だと認めてもらっていないければ協力してはもらえないのさ」。

記事掲載を中止させるCIAの常套手段

スノーデンによる機密情報の暴露以降、一部の報道記者がますます激しく牙を剥くようになってきたと、CIAはご不満だ。だがそれでも安全保障問題を担当する記者は、今で

もCIAのルールに従順な者が多い。遅くとも記事が出る前日にはCIAの広報課に知らせる、という不文律を含めてだ。ワシントン¹の報道メディアは同盟諸国の情報機関にも同じように気遣いを示している。「イスラム国」のテロリスト「ジハーディ・ジョン」の正体に関する記事がその好例だ。ジャーナリストのジェームズ・フォーリーやステイヴン・ソトロフ、援助団体職員のデイヴィッド・ヘインズ、アラン・ヘニング、ピーター・カッシングを含む、複数の人質を斬首した人物だ。〔日本人ジャーナリストの後藤健二²、軍事〕『ワシントン・ポスト』紙のアダム・ゴルドマン記者が初めて報じたように、この覆面の処刑人は実はモハメド・エムワジというクウェート生まれのイギリス人^{*2}だった（エムワジは二〇一五年一月、シリアのラッカで米軍のドローンによる攻撃で殺害された）。ゴルドマン記者がエムワジの氏名を報道することをイギリスの情報機関に知らせると、当局者は二四時間待ってくれと求めたという。

理由は説明しなかったが、このケースの場合は妥当な対応だった。ゴルドマンは回想する——「私は当時は知りませんが、エムワジの親族がリンチされないよう、イギリスから（クウェートへ）出国させる必要があったのです。私たちは政府の主張は常に真剣に受けとめます。筋の通った主張をしてくれば、こちらが聞き入れることもあります。

私たちジャーナリストは、常に政府には一発見舞ってやるべきだという意見はもちろんありますよ。でもお互いの関係というものもありますからね。こちらがすべての情報をつかんでいないことだってあります。わずかな部分しかわかってない……一部は探り出したが、全貌は見えていない、というケースもあるわけです」。

これは掲載を取りやめさせたい記事に対してCIAが使う常套手段だ——その記事がCIA職員その他を危険にさらす恐れがあると主張するのだ。「ジハーディ・ジョン」をめぐるイギリスの情報機関のケースのように、報道の延期を求めるCIAの要請は明らかに合理的なこともある。だが多くの場合は、実に怪しいものだ。例えば二〇一二年、CIAの職員二人が外交官ナンバーをつけた車でメキシコ・シテイの郊外を走っていたところ、路上で待ち伏せを受けて襲撃された。襲撃犯らは麻薬組織と通じていたとおぼしき私服の連邦警察官だった。運転していたCIA職員の巧みなハンドルさばきのおかげで、二人は辛くも逃げ延びた。この事件が報じられたとき、「アメリカ政府当局者」が襲撃されたと公表されたが、所属機関は明かされていなかった。イギリス人ジャーナリストのヨアン・グリロは当時、大手通信社（彼の希望で社名は伏せる）の仕事をしていたが、アメリカ麻薬取締局（DEA）のメキシコ駐在のトップに電話をしたところ、自分の部下ではないと

言われた。

「アメリカ大使館が二人の素性を明かしていないことから、すぐに何か臭いと感じました」とグリロは言う。「DEAの国際作戦部でかつてトップを務めた人物に電話をしてみると、真実を明かしてくれました——二人はCIAだと」。グリロが編集部に知らせ、CIAを担当する記者がCIA本部に問い合わせた。すると電子メールできつい調子の返信があり、暗に二人が職員であることを認めしたが、その情報を報じないよう強く念を押してきた。今回の襲撃事件を見ればわかるように、命に関わるからだ、と。グリロ記者はこう回想している——「編集部の幹部たちはすぐに怖気づき、なんと（私に）二人の所属先の情報はそれほど重要なかと聞いてきたんです。結局、記事の報道はしばらく見合わせることになりました。すると一日もしないうちに、二人がCIA職員であるとメキシコの新聞が暴露したのです。おそらくメキシコ政府筋からのリークでしょう。私はスクープを逃したこと、そしてわが通信社があれほど簡単に脅しに屈したことに、失望しました。こうした事件の場合、CIAがいつまでも隠し通せるはずはないにもかかわらず」。

棚上げされた『ニューズウィーク』誌のスクープ記事

CIAへの取材は競争が熾烈で、記事を出すのをためらっていると痛い目に遭う。『ニューズウィーク』誌のジェフ・スタイン記者も、それを身をもって学んだ。二〇〇八年二月、レバノンのイスラム武装組織ヒズボラ「イスラム教シーア派の原理主義武装政治組」の「黒幕」だったテロリストのイマド・ムグニヤが、シリアのダマスカスで自動車爆弾によって怪死した。ムグニヤは早くからレバノンその他でテロ活動の種を蒔き始めた人物だ。まだアメリカ人のほとんどはウサマ・ビンラディンの名前すら聞いたことがなかったころの話だ。ムグニヤは一九八三年のベイルートのアメリカ大使館と海兵隊兵舎への爆弾テロの首謀者だと考えられ、CIAの近東局長、ロバート・エイムズの誘拐殺人も彼の仕業だとされている。ムグニヤはさらに、一九九二年のブエノスアイレスのイスラエル大使館への爆弾攻撃や、二年後のイスラエル共済組合会館の爆破も仕組んだと疑われている。

二〇〇八年のムグニヤの死は、ムグニヤ本人だけを標的にして殺害するという完璧な暗殺で、イスラエルの情報機関のモサドによるものだと言われ、長年にわたって報道されてきた。ところが、実はこれがジョージ・W・ブッシュ大統領が直々に承認したCIAによる暗殺だったと、『ニューズウィーク』誌のスタイン記者が突きとめたのである。^{*3}二〇一三年の秋、

暗殺作戦に関する最後のディテールをまとめあげると、スタインはCIAから「ノーコメント」という型通りの反応を引き出すだけでは満足できないと考えた。安全保障問題のベテラン記者であるスタインは、今回のスクープはCIAの最高の働きぶりを示すものだと見て、協力を得られると踏んだのだ。CIAは暗殺や破壊活動など数々の前歴を持つ危険なテロリストを消したのだから。「正当化できる報復殺人というものがあるとするれば、まさにこれだ」と、スタインはCIAの当局者たちに言ったそうだ。「しかもこの爆弾は決して巻き添え被害が起きないように設計され、一般市民もムグニヤの家族も、ほかの誰も殺害する恐れがないものでした。ムグニヤだけをやっつけられるような形の爆薬ができるまで、技術陣が何度も試行錯誤を繰り返したことは間違いありません。それが私の口説き文句でもあったのです——クリーンな、正当化できる殺しであった、と」。

ところがスタインも驚いたことに、記事を掲載すれば海外のCIA職員がヒズボラに処刑される恐れがあると、CIAは言い張った。『ニューズウィーク』誌のジム・インポコ編集長はCIAの要請を受け入れ、記事の掲載を一時的に見合わせることに同意した。そしてそのまま棚上げしたのだ。数カ月が過ぎ、やがて一年が過ぎた。「場合によっては記事を掲載しても何の役にも立たず、誰かの命を危険にさらすだけのこともあります。その

ため掲載を当面見合わせることはあります」とスタインも認める。「しかし連中はいつだつて、誰かの命を危険にさらすことになると言うんですよ」。二〇一三年一月、CIA本部で開かれた会議の席上、最高幹部たちはこの記事を完全にボツにすべきだと「強く主張」した。「当時の地政学的な文脈から言えば、CIAの主張は大いに説得力があった」とインポコ編集長は述べた。

二〇一五年一月三〇日の金曜日の晩、スタイン記者がムグニヤ暗殺に関する記事の原稿を書き上げてから一年以上ものち、CIAの職員が苛だたしげな調子でスタインに電話を寄越した。『ワシントン・ポスト』紙が同じネタを握っており、CIAが掲載中止を訴えたにもかかわらず報道するようだと知らせてきたのだ。スタインはそれなら『ニューズウィーク』誌も当然ながら掲載すると答えた。するとCIAの職員は再び『ワシントン・ポスト』紙の記者に連絡し、同紙が記事を載せる予定であることを『ニューズウィーク』誌に漏らした、と伝えた。『ワシントン・ポスト』紙は問題の記事掲載の前倒しを決定。日曜版の新聞に載せる予定だったが、すぐにウェブ版で報じることにした。こうして金曜日の午後一〇時ごろ、アダム・ゴールドマンとエレン・ナカシマの連名の記事がオンライン・ニュースに掲載され爆弾を落とした。スタインはスクープ合戦で出し抜かれてしまっ

たのだ。

両者の記事には多くの相違点があった。『ワシントン・ポスト』紙版のストーリーでは、実際に暗殺作戦の段取りをし、実行したのはCIAから依頼を受けたイスラエル側で、テルアビブの管制室から遠隔操作で行った、としていたのだ。『ワシントン・ポスト』紙のゴールドマンも、『ニューズウィーク』誌のスタインも、自分のバージョンが正しいとしている。「私には三人の非の打ちどころのない情報提供者がいて、彼らは引き金を引いたのはイスラエル側だと証言している」とゴールドマンは言う。

これに対してスタインは、「何分の一秒という精密さが必要な作戦を実行するには、テルアビブは遠すぎる」と反論する。「もつとも重要なのは、ムグニヤがダマスカスのどこにいるのか、その情報をイスラエル側がCIAに提供したという点です。あまりにも多くのアメリカ人を殺害したことに對し、CIAが直接ムグニヤに復讐できるようにしてやるためです。ギャング同士の友好的な取り引きみたいなものでした——まさに『ザ・ソプラノズ』『アメリカの人気テレビドラマ・シリーズ』の世界ですよ」。だがいずれにしろ、もはやスタインの特ダネではなくなっていた。

編集部がCIAの要請で記事を棚上げしたことを残念に思うかと、私はスタインに訊い

てみた。

「イエスとノーです。二〇一三年一〇月に初めて記事のことをCIAに伝えた時点では、掲載を見合わせるべき強力な論拠があったと、私も確かに認めました。ヒズボラ内には、尊大なCIAに報復しようとする騒ぎ立てのような武装グループがいましたからね。しかし一年後には、ヒズボラはがっちりレバノン政府の一部に組み込まれていましたし、『イラクとシリアのイスラム国』（ISIS）の台頭で、シリアではヒズボラとCIAは事実上の同盟関係になっていたわけです。状況は変わったのだから、もう掲載できるだろうと私は思いました。でも私の出番は回って来なかったのです」

政府の言いなりにならなかったゴールドマン記者のスクープ

これまで『ワシントン・ポスト』紙のアダム・ゴールドマンは数々のニュースをすっぱ抜き、ライバル記者たちはもちろん、CIAにも苦い思いをさせてきた。最新の事例では、二〇一六年一月、ゴールドマンと同紙の同僚記者グレッグ・ミラーとがCIA内の「洗眼」アイウォッシュと呼ばれる慣行についての特ダネを報じた。^{*4}それは機密扱いの作戦について二通の矛盾するメモを局内で回すというものだ。そして本当のメモはごく限られた範囲の職員にしか見

せず、事実上CIAがみずから職員を欺くことになる。意図的に虚偽の情報を流すガセネタ・キャンペーンをここまでやるとは、CIAの本気度が窺える。拘束者たちに対するCIAの拷問を調査していた上院の調査員らがこの慣行の存在に気づき、ドローンによる攻撃など、世界中の作戦に関する虚偽の報告をCIAが局内に流していた事例が多数見つかったのだった。

二〇一二年、当時はAP通信にいたゴールドマンは、同僚のマット・アプツゾ（現在は『ニューヨーク・タイムズ』紙記者）と一緒に、あるテロ計画の噂を聞きつけた。ウサマ・ビンラディンの死からちょうど一年となる五月一日に合わせ、アルカイダがアラビア半島で爆弾テロを計画しているというのだ。計画によれば、大西洋を横断するアメリカ行きの旅客機に爆弾を仕掛けることになっていた。ホワイトハウスとCIAの両者からの圧力を受け、AP通信は一週間だけその記事の配信を控えることにした。「慎重な扱いを要する諜報作戦がまだ進行中だから」というのが理由だったと、ゴールドマンのちに書いている。しかし情報源の人物から、爆弾テロ計画があることをアメリカ政府が公表する予定だと聞き、AP通信はオバマ大統領の公式発表の前日に記事を配信した。その結果、ゴールドマン、アプツゾ、そして彼らの情報源に関するAP通信の電話記録が司法省に押収

された。

ゴールドマンに言わせれば、いち早く事実をつかむと、時には強大な権力者たちの逆鱗に触れることもあるという。「そもそも私は当局者とのパイプを優先するアクセス・ジャーナリストではない」と、ゴールドマンは説明してくれた。「そういう連中はリアルな事実をつかめやしない。クソみたいなネタをもらうだけだ。その代わり私のようなやり方は情報源を失う覚悟も必要になる。実は多くの記者連中にはそれが一番のアホくさい心配の種なんだ。だがそんなのは仕方がないことだ。新たな情報源を見つけなければいけないだけさ。第一、情報源を失ったこともないようなやつは、きつときちんと仕事をしていないんだらうよ」。

AP通信にいた当時、ゴールドマンとアプツゾのコンビはスクープで『ニューヨーク・タイムズ』紙を出し抜いたこともある。二〇〇七年にイラン沖の島で行方不明になったアメリカ人、ロバート・レヴィンソンに関するもので、同紙が六年間もお蔵入りさせていたネタだった。レヴィンソン失踪後、彼はタバコの密輸を捜査していた私立探偵だと、政府関係筋は記者たちに語った。しかし『ニューヨーク・タイムズ』紙のバリー・メイヤー記者がレヴィンソン家の弁護士にインタビューをしたことで、政府の作り話は破綻した。弁

護士はレヴィンソンの安全を脅かすようなことは一切報道しないとの条件で、レヴィンソンに関する資料の閲覧を同紙に認めたのだ。すると実は、レヴィンソンはイランでスパイ活動をするためにCIAが雇っていた人物であることがその資料で証明された。一方、AP通信のゴールドマンとアプゾもレヴィンソンとCIAのつながりを突きとめた。三年間配信を見合わせたのちの二〇一三年一月三日、ホワイトハウスと（レヴィンソンの出身地、フロリダ州選出の）ビル・ネルソン上院議員が報道しないよう訴えたのに抗して、AP通信はついに記事を配信した。一方『ニューヨーク・タイムズ』紙は、より政府の要望に従順だったがゆえに、ホットなスクープを逃したのである。

AP通信のキャサリン・キャロル編集長は公式声明を出し、記事を配信したみずからの判断の正しさを主張する論陣を張った——「レヴィンソンの行方に関する確たる情報が一切ない中で、報道が彼をリスクにさらすことになるかどうかを判断することは不可能でした。拘束者たちがレヴィンソンとCIAとの結びつきを知っていることはほぼ確実ですが、その拘束者が何者なのか正確にはわかりません。ですからレヴィンソンが担当しているCIAのミッションについて報道した場合、それが拘束者たちにとって意味のある情報なのかどうか、知ることは困難です。これはリスクがないという意味ではありません。しか

しこれ以上の手がかりがない中で、私たちはこの情報の重要性が報道を正当化すると結論づけたのです^{*5}。レヴィンソン以前、もつとも長く拘束されたアメリカ人は、一九八五年にヒズボラによってレバノンのベイルートで誘拐され、六年後に解放されたAP通信の編集者、テリー・アンダーソンだった。本書執筆時点では、今も行方不明のままのレヴィンソンがその記録を更新している^{*6}。

総合的に見れば、アダム・ゴールドマンの意見は正しい。安全保障問題を取材する記者たちの中で、既成の権力である情報機関が求めるゲームのルールに抵抗し、あるいは無視するような人たちこそ、もつとも優れたスクープをものにするのだ。だがそれには勇気が必要。アクセス・ジャーナリズムを退け、CIAと決別することは、メディアと公安国家の協力という長年の伝統に背くことになるからである。

驚くべき CIA の世論操作
ニコラス・スカウ／伊藤 真 訳

発 行：集英社インターナショナル（発売 集英社）
定 価：760 円（本体）＋税
発売日：2018 年 8 月 7 日
ISBN：978-4-7976-8027-0 C0231

ウェブでのご予約・ご注文は [こちらにどうぞ！](#)